平成二十九年度　芸術鑑賞感想文
ヘレン・ケラー～ひびきあう者たち～

東京演劇集団　風

３年生　Ｗさん

ヘレン・ケラーは本では読んだことがありましたが、舞台で鑑賞したのは初めてでした。

机、ベッド、ポンプ、水など多くの小道具があり、それを使って演じられる「ヘレン・ケラー」はとても魅力的で惹きつけられる作品でした。

孤独を感じていた二人が出会い、お互いの存在を感じあうということは、何かの縁が無い限り訪れない奇跡だと思います。だから、私はアニーとヘレンはとても強い運命があったのだと思います。

十八年生きてきた中で、このような出会いがあったのかは、今の自分にはまだ分かりません。この先にあるのかも分かりません。ですが、このような縁があったときのために今を一生懸命生きたいと思います。アニーの根気強さを見習い、困難の壁に出会ったときに乗り越えられるようになり、人生の中で共鳴できる人を見つけたいです。

３年生　Ｔさん

ヘレン・ケラーの劇を見て，限界を決めつけてはいけないと言うことを思いました。ヘレン・ケラーの両親は無意識に彼女の限界を決めつけてしまっていたけど、サリバン先生の言葉によって気づかされます。人間は無意識に限界を決めてしまいがちですが、可能性はもっとあると思うことが大切だと思いました。また、サリバン先生の熱意がものすごく印象的で忘れられません。サリバン先生はヘレン・ケラーの人生を大きく変えました。何かを変える人は自信と強い思いをもっている人だと思いました。それがヘレン・ケラーにも伝わったのだと思います。ヘレン・ケラーとサリバン先生が出会うことは運命だったと思います。でも、もし出会っていなかったらヘレン・ケラーは変わっていなかったかもしれない。

周りの人が私を変わらせてくれることがこれから先、絶対あると思うので、人との関わりを大切にしていこうと思いました。そして、サリバン先生のように限界を決めつけず、自信と強い思いを持って生きたいです。

３年生　Ｃくん

私は劇「ヘレン・ケラー」を見て幸せについて考えさせられました。人は何を持って幸せと呼べるのか。私は「ヘレン・ケラー」を見るまで、人並みに生きることが幸せだと思っていました。では、ヘレンは不幸だったのでしょうか。私は劇を見る限りはそうは見えませんでした。見えなくても、聞こえなくても、しゃべれなくても幸せは感じとれるものだと思いました。ではヘレンは何を持って幸せだったのでしょうか。私は「家族の愛」「周囲の人々の思いやり」だと考えました。もしあなたがヘレンと同じように見えない、聞こえない、しゃべれなくなるところを想像してみて下さい。その時、あなたを支えてくれる人々があなたの「幸せ」です。このように人は五感のいくつかが使えなくなっても幸せを感じることができます。私達の目が見えるが故に見えない幸せを感じることが難しくなっているのではないでしょうか。

３年生　Ｋさん

待ちに待った芸術鑑賞、一年の時に見たジャンヌダルクの演劇は未だに頭に、目に焼き付いている。淡い期待と少し高鳴る胸と共に、空いている真ん中の前の席へと座る。開演が待ち遠しく、何度もあらすじの書かれたプリントに目をやっていた。先生の言葉とブザー、暗闇の中で動く役者の方々と小道具に結んでいた口が緩み、期待にふくらんだ心は浮きだって笑みが零れる。

劇が始まり、ヘレンを見ていて気づいた。彼女は耳が聞こえない、目が見えない、話せないの三重苦。その演技だ。目が物をとらえる前に手が動き、音ではなく響いた地面の感覚や触れた凹凸で判断するときも、その目の先は目の前の人から若干外れていること。「疑っている」感嘆に知らずと息を飲んだ。サリバン先生の猛烈突進でありながらも悩み、ヘレンを心の底から信じ身体を大きく使って話すところ、本で読んでいた憧憬が目の前に現れた気さえした。

３年生　Ｙさん

東京演劇集団風さんが演じて下さった「ヘレン・ケラー」は、目が見え耳が聞こえる私は恵まれていること、また人間に限界は無いのだということを改めて感じさせてくれた。

思い出してみると、私は小学生の頃何度も図書館でヘレン・ケラーの伝記を借りて読んでいた。その時の私も何か惹かれるものがあったのだろう。なので大まかな内容は知っていた。でも、私の中でサリバン先生はあそこまで熱血というイメージはなかった。今回は「ヘレンは私の言われた通りにやっているだけなのです。ただの服従では意味がないのです」という言葉がすごく印象に残った。やはり他人の指示通り動くのではなく自分で考えて行動することが大切なのだ。それは私達高校生にも言えることだと思う。先生に言われた勉強、部活の練習も自分の考えを持ってすれば違うものになると思う。頭を使い限界を決めず、頑張っていきたい。

２年生　Ｎさん

小学生で初めて読んだ時には「聞こえないし、見えないのに言葉がわかるようになるなんてすごいな。サリバン先生も頑張ったな」ぐらいの感想しか持っていなかった。しかし、芸術鑑賞を見るとサリバン先生に出会うまでのヘレンがいかに孤独だったか、恐かったかが分かった。

耳が聞こえず、目が見えず、周りで何が起こっているのかも分からず、誰を何を信用していいのか分からない状態であれば、ヘレンの初めの暴れようは仕方がないと思った。あれは我がままではなく、恐怖や不安の現れだったのだ。それと同時に、サリバン先生のすごさも感じた。自分の子供でもないのに、ヘレンの心に寄り添えるように愛を与え続け諦めなかった彼女を尊敬しました。

ここで学んだことは「相手を信じる心」と「自分を信じる心」である。相手を信頼していたからこそ、途中で投げ出さずに二人で成し遂げることができたし、自分を信じていたからこそ、その可能性にかけることができたのだと思います

２年生Ｍくん

私はヘレン・ケラーを見て思ったことは、しゃべれなくても、耳が聞こえなくても人と人は心が通じ合うのだと思いました。初めはなにひとつ心が通じ合わなくて、反抗ばかりされていたけどサリバン先生は諦めずに、しっかりとヘレンと向き合って接していたところが感動しました。

自分は親と話したりするときに心と心で会話をせずに、ただ軽い気持ちでしゃべっているので、これからはしっかりと相手が何を思って話してくれているのかを考えて、それを理解した上で話していきたいと思います。そうしたら、家族での愛というものが深まっていくと思います。また、友だち同士でもしっかりと心でしゃべっていき、本当の友達となるようにしていきたいと思います。そうすることで、これからの人生を助け合い生きていくことができると思います。

２年生　Ｋさん

この作品は二時間の中ですごくたくさんの感情になれる劇でした。生まれた頃から周りの人間とは違う個性を持ち、どうしようもないかわいそうな子。というイメージに縛り付けられ過ごしてきたヘレン・ケラーが一人の先生によって人間らしさや尊重されるべき個性のあり方などを取り戻していく一つ一つの過程すべてが印象的でした。

諦めなければ何らかの変化は得られること、他人の勝手なイメージをくつがえし、自分のもっている魅力は隠さずに磨き続けようと思いました。

この劇を通して自分のダメなところもプラスに変えられるのだと、なんだか自信がつきました。自分を高めて頑張っていきます。

２年生　Ｋさん

私はヘレン・ケラーの子供の頃のお話はあまり知りませんでした。なので劇で見ることができて、いくつか考え深いものがありました。

まず障害者に対する気持ちを他の人が勝手に決めつけて理解に苦しむ点です。互いに成長し生活していく中で理解し合い助け合うことは、重要なことであると改めて考えさせられました。

次に劇団の方の演技です。それぞれの方が自分の役に成りきって恥ずかしがることなく演じておられる姿はかっこよかったです。

最後にこの作品を通して、勝手に相手を決めつけずに、理解をしようと努力しようと思いました。また、理解し合えた上でさらに、ヘレンと先生のように仲間と共鳴し合えるように自分も諦めずにポジティブに生活をしていきたいと思いました。

２年生　Ｈくん

ますヘレンとサリバン先生は似たもの同士だと思う。共通点は２つある。まず一つは、二人とも元気が良すぎることである。そしてもうひとつは、二人とも「孤独」だったと言うことだ。

サリバン先生はジミーを亡くして、肉親がいなくなり、それ以降弟の亡霊に取り憑かれ、ヘレンに出会うまで「孤独」だった。ヘレンは目が見えず、耳も聞こえない、話せないので、まともな意思疎通もできない。ヘレンは真っ暗闇の中ずっと「孤独」に生きてきたのだ。そんな二人だから最後に「共鳴」でき、それからかけがえのないパートナーになれたのだと思う。

この劇で最も重要なテーマは人々は共鳴し合い、お互いを理解し合い、パートナーとなることができれば、困難、不可能とされることにも打ち勝てると言うことである。私も誰か共鳴できる人を見つけたい。

１年生　Ｏさん

私がもしヘレンの立場だったら、自分はどうしていたかなぁって考えてみました。私たちが当たり前に過ごしていることがヘレンにとっては当たり前の事ではなくて。しかも人間にとって大事なのは相手の目を見て、声に触れて会話することがとても大事だと思うんですけど、ヘレンはその逆で、相手がどんな顔でいるのか、どんな声なのか、が見えない聞こえないという病気を抱えています。二歳の誕生日を迎える前に突然の病気で一切の光と音を失ったと言われます。

こんな小さい頃から真っ暗な闇で生きてきてすごくさみしかったと思います。相手に伝えたいのに伝えられないもどかしさがすごくあったと思います。その頃にサリバン先生と出会い、ヘレンに言葉の素晴らしさ、人とコミュニケーションをとる事の楽しさ、自分を表現できる喜びなど、様々な事をヘレンに教えます。サリバン先生の愛と根気強い指導により、徐々に心を開き、言葉の素晴らしさに気づいていき好奇心旺盛な女性へと成長したヘレンの向上心と好奇心に満ちた生活は生きるお手本のようだなぁと改めて学べました。

１年生　Ｏさん

私はヘレン・ケラーはどんな話か知っていて、どちらかというと好きな話で、とても楽しみにしていました。やっぱり本で読んだのとは違う角度から物語を見ることができて、大切なことに気づくことができました。

それは何かと言うと、できないと決めつけずに少しの希望を信じてみることと、どんな形でもいいから相手とコミュニケーションをとることの大切さです。私はやる前から自分にはできないと決めつけたりすることが多く、やる前から諦めることばっかりだったけど、それはやめたいと思いました。周りの人が信じてくれなくても自分は信じて頑張り、最後は周りのみんなに信じてもらえるようになりたいと思いました。それはきっと今自分が叶えたいなと思っている将来の夢のためにも大切だと思いました。

もう一つの相手とコミュニケーションをとることは、私は人見知りで、なかなか話すこともできないし、人前では自分の意見を言うことができないので、少なくとも仲の良い子にはどんな形でもいいから自分の気持ちを伝えられたらいいなと思えました。アニーとヘレンの気持ちの変化によって感じ取れたことだと思います。

本ではしっかり感じ取れない魂のひびき合いが感じ取れたとてもいい劇でした。ヘレンの気持ちの変化がどこからかしっかり分かり、アニーとヘレンの心との向き合い方に勉強させられる所がたくさんありました。私はこれから先、自分の心としっかり向き合いながら生きていきたいです。

それから、アニーの力強さにあこがれました。自分の意志をしっかり持っていて、人に決めつけられた道を進むのではなく自分で道を切り開いていく姿にとても感動しました。

最後に、幸福感って少しずつ感じられなくなっていくかも知れないけど、これから先でも幸福感を感じられる、今では当たり前でも最初は当たり前ではなかったことを思い出して、一日一日を大切にして過ごしていきたいと思いました。今回ヘレン・ケラーを見てたくさんのことを学ぶことができました。一つの劇で自分の考え方がこんなに変わると思っていなかったのでびっくりです。観ることができて良かったです。

１年生　Ｆさん

人は人とコミュニケーションを図る時、どのような行動をとるだろう。私は多くの人が会話をすると答えると思う。しかし、それが出来なかったとしたらどうだろう。

私は、ヘレン・ケラーという人物について何も知らなかった。そんな中見た舞台上で繰り広げられた物語は衝撃だった。三重苦のヘレンと取っ組み合いをしながら、会話ではないコミュニケーション方法である指文字を教えるサリバン先生の姿は、その時の私には可哀相という印象を与えた。無理に強要してやらされているように見えたからだ。しかしその考えは一変した。

物語は終盤の頃、変化が起こった。ヘレンはまたもサリバン先生との格闘になる。だがその格闘には、ヘレンの伝えたい、話したいという思いとサリバン先生のわかってあげたいと言う思いがぶつかり合っている、響き合っているように見えた。そうして指文字が使えるようになったヘレン。あの格闘は、思いの共鳴であると思った。

人は必ずコミュニケーションが必要だ。しかし、この物語を見て必ずしも会話だけではない伝え方があり、それらは全て人と人との心の共鳴であると思った。私は自分と相手とが共鳴できるようなコミュニケーションを取れるようになりたい。

１年生　Ｙさん

私はヘレン・ケラーを鑑賞して、サリバン先生から「辛い事にも挑み続け、諦めない心」というものを学びました。

サリバン先生は、弟が亡くなってしまった時も、ヘレンとケンカした時も、諦めないで挑み続けています。だからこそ、ヘレンにも響き合うことが出来たのではないでしょうか。

また、私たちが普段見ているテレビや映画と違い、音声の加工がされていないことや、スクリーンで大きくなっていないのに、やはり演じ手さん、役者さんという職業はとてもかっこいいなと思いました。

私もこれからの人生の中で「誰かに決められた道を進んでいく自分」ではなく「自分自身で決めながら突き進んでいく」人間になりたいなと思います。今日学んだことをいつまでも忘れないで、自分の人生を諦めないで挑み続けていきたいと思います。

１年生　Ｍさん

ヘレン・ケラーと言う名前は以前から知っていた。小学校の頃、伝記か何かで読んだ気がするが、いまいちピンとこなかった。そんな中、先生が出したキーワードが頭の中で結びついた。「三重苦」見えない、聞こえない、話せない。ひたすら暗闇の中を、誰の助けも呼べず、さまよっているような感覚だろうか。私には到底耐えられそうもないと思った。したがって、どのようにして彼女が暗闇の中で生きていったのか、とても興味がわいた。

サリバン先生、この人が彼女を暗闇の中で導く様が、私の中で最も「共鳴」した。私は人と分かり合おうとするとき、まずは言葉を交わす。言葉により相手のことを知り、理解しようとする。よって彼女らのコミュニケーションは私にとって衝撃的だったのだ。まずは体を触れ合わせ、取っ組み合いをする。私ならまずこんな事はしないと断言できる。だがよく考えてみると、このコミュニケーション方法は私たちも参考にすべき点があると思った。言葉ではなく態度で表すというのは偽りがない。取り繕うことが非常に難しいからだ。きっとそんなサリバン先生の取り繕わない姿勢がヘレンを変えたのだと思う。

私はこの劇から、人と分かり合うためにわざわざ細かい段階を踏んで、徐々にやっていこう。なんて思っていた自分が急に愚かしく見えた。確かに段階を踏むことが必要な時もあるだろうが、少なくともこれからの高校生活は、あえて取り繕うことのない姿勢で人との輪を広げていこうと思った。

近江高等学校　生徒会